# 『立教学院史研究』第2号　巻頭言

老川慶喜

米国聖公会の宣教師、チャニング・ムーア・ウィリアムズ主教が立教学院の前身となる立教学校を築地に開設したのは、一八七四（明治七）年でありました。したがって、本年立教学院は、創立一三〇周年という記念の年を迎えることになります。一八七四年一月には、副島種臣、後藤象二郎、江藤新平、板垣退助らが民撰議院設立建白書を左院に提出しており、日本の近代化をめざす、いわゆる自由民権運動が始まろうとしていました。以来、立教学院は日本の近・現代史の歩みの中で「キリスト教に基づく教育」という独自の理念を掲げながら、教育と研究に研鑽を積んできたのであります。

しかし、そうした立教学院の歴史がこれまで十分に明らかにされてきたかということになりますと、残念ながら現状ではにわかに首肯することはできません。私は、かつて立教学院創立一二五周年事業の一環として企画された『立教学院百二十五年史』の編纂事業にかかわったことがありますが、その過程で立教学院史の研究を深めていく必要を痛感いたしました。立教学院自身の歴史が、日本の近・現代史の重要な一部を構成するのですから、立教学院史の研究は、教育・研究機関である立教学院の、いわば社会的な責務であると考えられるからであります。

しかし、立教学院史研究の意義はそれだけにとどまりません。日本では、学校ばかりでなく企業も、しばしば周年事業として自らの会社史を刊行することがあります。私もいくつかの会社史を執筆したことがありますが、企業は自らの経営戦略を樹立することを会社史刊行の目的としております。したがって、よい会社史とは自社の自慢をするものでは

なく、失敗も含めてありのままの経営の歴史を描くものと言うことができます。そうでなければ、会社史が経営戦略を考える資料として役立つことなどありません。

立教学院史についても同様のことが言えると思います。立教学院の歴史を資料に基づいて実証的に明らかにすることを通じてのみ、今後の立教学院の歩むべき方向を正しく捉えることができるのではないかと思われるからです。そうした意味では、立教学院史研究は、立教学院の過去の歴史を見るばかりでなく、これからの立教学院のあるべき方向を見定めていく上からも、きわめて重要な作業であると言うことができるように思います。

『立教学院百二十五年史』は、実証的な立教学院史を意識的に描こうとした、おそらく最初の試みではなかったかと思われます。その編纂過程で、関係者の努力により実に多くの新資料が発見され、その成果は『百二十五年史』資料編（全五冊）に反映されております。しかし、同書の編纂事業の中では、通史を執筆することはできませんでした。立教学院では、これまで『立教学院設立沿革史』『立教学院八十五年史』『立教学院百年史』などの通史を刊行してきましたが、これらの水準を乗り越える通史を執筆するためには、立教学院史研究をさらに深める必要があると考えたからであります。

『百二十五年史』の刊行後、立教学院史資料センターが設置され、研究紀要『立教学院史研究』が発刊されることになりました。こうして、立教学院史研究の条件はようやく整備されてきました。立教学院史資料センターでは、現在学内外の研究者の協力を得て、「立教学院と戦争に関する基礎的研究」「立教築地時代の研究」という二つの研究プロジェクトを推進しております。また、立教学院全体にかかわる資料の収集・整理も積極的に進めています。さらには、講演会や展示、大学の全学共通カリキュラムでの授業（「立教大学の歴史」「立教学院と戦争」）などを通じて立教学院の歴史を広く学内外に広めようとしております。

本号に掲載された論文や対談には、創刊号と同じく以上のような資料センターの活動と研究の成果が遺憾なく発揮されております。立教学院史研究の発展のためには、このように地道な実証研究を積み重ねていくことが何よりも重要であります。そして、立教学院史研究が立教学院の学生や生徒・児童、および教職員に共有され、あるべき立教学院の姿をめぐって活発な議論が展開されればと思います。最後に、近い将来、実証密度が高く、これまでの立教学院史の研究水準を凌駕する通史が刊行されることを期待しております。